

仙台大学 広報室

# Monthly Report

大学近くのジュウガツザクラ

## 明成高校との高大連携事業で成果結実 佐藤久夫教授率いる明成高校3連覇達成！— バスケット・全国高校選抜優勝大会(ウインターカップ)



写真：明成高校提供

12月29日(金)、バスケットボールの全国高校選抜優勝大会(ウインターカップ)男子決勝が東京体育館で行なわれ、本学の佐藤久夫教授率いる明成高校(総体1位・宮城県)が土浦日大高校(茨城県)を78-73で破り、3年連続4度目の優勝を果たしました。

本学と姉妹校である明成高校は、「高大連携」の取り組みの一つとして、男子バスケットボール部の強化を行なっております。明成高校男子バスケットボール部は、本学の佐藤久夫教授が指揮を執り、本学の高橋陽介講師がチームトレーナーとして選手たちをサポートしております。

この度、明成高校と本学との高大連携事業が結実し、バスケット全国高校選抜優勝大会(ウインターカップ)で見事3連覇(4度目の日本一)という快挙を成し遂げました。

引き続き、明成高校男子バスケットボール部への熱い応援をよろしくお願い致します。

### <佐藤久夫教授と高橋陽介講師のお話(1月8日)>

「昨年末に開催された全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会におきまして、優勝という結果で終える事が出来たことを誠に嬉しく思っております。高大連携事業において良い結果を出す事が出来たのも、大学そして高校の方々のご理解とご支援があつてのことと感じております。厚く御礼申し上げます。今後も、高校での現場指導経験を大学での教育に活かし、大学での研究・教育を通して学んでいることを高校での現場指導に活かしていくことで、高大連携事業の効果を出していきたいと考えております。」

## < 目 次 >

明成高校と本学との高大連携事業で成果結実—本学の佐藤久夫教授率いる明成3連覇達成！／バスケット全国高校選抜優勝大会(ウインターカップ)	1
白石市・柴田町・仙台大学の連携による2020東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプ等招致記者会見を開催	2
「安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議」で田中智仁准教授が講演	3
運動栄養サポーター認定証書授与式を初開催	4
日中国際共同研究 研究協議会	4
学生の競技結果	8

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら  
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

### 広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"  
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—2017年創立50周年  
50 years Anniversary of Establishment in 1917

SENDAI UNIVERSITY Since 1917

SPORTS FOR ALL ~スポーツは健康な人のためだけでなく、全ての人に~

## 白石市・柴田町・仙台大学の連携による2020東京オリンピック・パラリンピック 事前キャンプ等招致記者会見を開催



招致成功に向け、両手で固い握手を交わす3者代表＝仙台大学  
(左から滝口柴田町長・風間白石市長・朴澤理事長・阿部学長)

12月22日（火）、白石市・柴田町・仙台大学は、2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、事前キャンプ等の招致を連携して推進していくことで合意しました。同日、本学管理研究棟2階大会議室で、風間康静白石市長、滝口茂柴田町長、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長による「2020東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプ等招致記者会見」が開催されました。

行政側を代表して風間白石市長は、「官民一体となって、招致活動を成功させていく取り組みを行なっていきたい。地方創生を見据え、仙南地域活性化の起爆剤にもしていきたい」。仙台大学を代表して朴澤理事長は、「教育・研究に留まらず、地域貢献も大学の大きな責務の一つである。地域と一体となって、2020年東京オリンピック・パラリンピックに関与していきたい。招致が実現すれば、人材育成にも役立てる絶好の機会になる」と期待を込めて話されました。

今後は、本年度中に協議会を設置して、白石市・柴田町・仙台大学の概要や競技施設、滞在環境などを紹介するホームページやガイドブック・プロモーションビデオを制作し、積極的な招致活動を展開していきます。また、招致種目は、現時点では絞らず、オリンピック・パラリンピック双方の幅広い競技について招致を検討していきます。

## 消防訓練を実施しました



仕事納めである12月28日（月）仙南地域広域行政事務組合柴田消防署予防係・消防士長の沼田純一氏他のご協力の下、消防訓練を実施しました。今回は学生食堂から出火したという想定で、約60人の教職員が参加し、真剣に取り組みました。

119番への通報後、本番さながらに火災消火班や避難誘導班、情報連絡班がそれぞれの持ち場である火元や守衛室に駆けつけ、その他の教職員は速やかに噴水前に避難、実際に火災消火班数名が消火器を使っての消火と放水を体験しました。

消火活動を行った一人の太田教授は「今まで何度も消防訓練に立ちあってきたものの、自分で消火器に触るのは初めてで、実際にグリップを握ってみるとその力具合などがよく分かり、勉強になった」そうです。

沼田消防士長は「火事が起きた際、1番大事なポイントは大きな声で、火事だ！と叫び、自分1人で対処しようとせず、できるだけ多くの助けを求めることです。初期消火が大切なのはもちろんですが、もし火を見て冷静でいられなかったり、消火器の使い方がわからず戸惑った場合には、とにかく一刻も早く逃げ、自分の命を最優先にしてください」と話されました。

阿部学長は「今日の訓練をこれからの生活に活かしましょう」と述べ、最後に沼田消防士長より「昨日も近隣で火事が2件起きました。これから放火が増える季節でもあり、燃えやすい物をできるだけ家の周辺におかないよう心がけることも大切です」といった具体的なアドバイスを頂戴し、終了となりました。

年が明ける3月には東日本大震災から5年目を迎えます。地震や火事など災害に強い大学として、日頃から防災の意識を忘れず予防に努めて参りましょう。

## 「安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議」で田中智仁准教授が講演



平成27年12月7日（月）角田市市民センターにおいて、「平成27年度安心して暮らせる安全なまちづくり連絡会議研修会」が開催され、田中智仁准教授が講師を務めました。この研修は市の生活安全条例の趣旨に基づき、関係機関等が情報や意見交換の場を通じて安心・安全なまちづくりを実現するため、共通認識をもって防犯活動の促進に努めることを目的として毎年開催されており、角田市の防犯協会連合会をはじめ子ども会育成会、各行政区長や民生委員など約40名が聴講しました。

「気軽にできる地域の防犯活動」と題して行われた今回の講演で田中先生は、犯罪発生に至るまでの仕組みをフローチャートで示し、犯罪行動を起こしにくくするために、防犯の環境設定が重要であることなどを話され、コンビニエンスストアの商品棚やレジの図を用いて少しの配置の工夫で死角を減らし犯罪を抑止することができること、また空き巣に狙われやすいのはどの家か？など3つのモデルケースから狙われやすい家を選ぶ問題も出題され、参加者が考え挙手して問題点を探るテストが行われるなど物理的・心理的に犯罪者を遠ざける環境づくりが防犯に役立つことなどの説明がありました。

質疑応答の時間、少年補導員からは地域の小学校等における「あいさつ運動」が果たす役割についての質問、行政区長の方からは「地域の空き家問題」についての質問がなされ、田中先生も一つひとつの質問に丁寧に答えていました。地域の様々な課題に対し地域の手で守ろうとする角田市の方々の意識の高さがうかがえました。

## 4ヵ国13名の留学生が日本の文化に触れる ～日本の原風景・とよま町を訪ねて～



留学生たちへ日本の囲炉裏について説明する伊達客員教授【右から3番目】  
＝武家屋敷「春蘭亭」

12月12日（土）、日本の文化に触れことを目的として、中国・台湾・ベトナム・ドイツからの留学生13名が日本文化体験学習「日本の原風景・とよま町を訪ねて」（仙台大学学生支援センター主催）で宮城県登米市を訪れました。

留学生たちは、登米市の登米伊達家第16代目である本学の伊達宗弘客員教授の案内で、教育資料館（旧登米高等尋常小学校）・伝統芸能伝承館・北上川河畔・武家屋敷「春蘭亭」を見学しました。

さらに、留学生たちは、養蜂園を経営している伊達客員教授の自宅に招かれ、ミツバチや養蜂についての説明を聞いたり、伊達家の歴史資料を拝見したり、おもてなしのお菓子とお茶を御馳走になったりと歓迎を受けました。ドイツのカール・フォン・オシエツキー大学オルデンブルクからの留学生であるピア・カタリナ・フローバルクさんは、「囲炉裏は初めて見ました。また、ドイツに抹茶はありません。日本の文化に触れ、ますます日本に興味を持ちました」。ベトナムのホーチミン市体育大学からの留学生であるグエン・タン・チュンさんは、「登米市の歴史的な建造物や伊達家ゆかりの鎧や兜などの武具の品々に触れ、本当に楽しく素晴らしい一日でした」と感想を話しました。

伊達客員教授は「古き良き時代の日本の原風景が登米には残っています。今回の体験学習が留学生たちにとって日本の文化・環境を知る良い機会になったらと思います。自国と日本の文化のあり方や違いを知り、客観的に日本を見てほしいです。ずっと留学生たちの心に残る経験、良い思い出になっていれば幸いです」と話されました。

## 運動栄養サポーター認定証書授与式を初開催



12月9日(水)、本学管理研究棟2階大会議室で、本学運動栄養学科生の「運動栄養サポーター認定証書授与式」が初開催されました。今回は、運動栄養サポーターとして、Stage1取得者2名・Stage2取得者14名の計36名が認定されました。

「運動栄養サポーター」は、健康増進や運動・スポーツの現場において、運動・スポーツをする人に対して栄養指導を行なう知識と技能を習得できたと認められた者に対し、本学運動栄養学科が独自に認定する学内資格です。運動栄養サポーターの養成プログラムでは、運動・スポーツと栄養に関する基礎知識に加えて、専門的知識を備える「勉強会」と実践的スキルを身につける「実習」・「課題」によるカリキュラムから構成されています。

カリキュラムは4段階のStageごとに構成されており、各Stageを取得すると様々な能力や活動の実施が認められます。さらに、本学では、運動栄養サポート研究会へ入会し、本学の運動部に対して栄養サポート活動を実施することで、実践経験を積むことができます。

同授与式では、阿部芳吉学長より、認定者を代表して、清野鉄雄さん【写真】(運動栄養学科2年-福島成蹊高校出身)へ認定証が手渡されました。



阿部学長からは「選手に対する心遣いや苦労があったと思います。努力は必ず報われます。自分の将来の夢に向かって実力を身に付け、さらに成長した姿を見せてほしい」。吉田龍哉事務局長からは「夢に向かって様々なことに挑戦し、充実した学生生活を送られることを切に願っております。事務局としてサポートしていきます」と学生たちに激励の言葉を述べられました。

同授与式終了後、清野さんは「栄養サポート活動に必要な基礎知識や技術を身に付け、意欲的に経験を積み、実践面を高めて後輩たちを引っ張っていきけるようになりたいです。一人前のスポーツ栄養士になれるよう日々精進して参ります」とさらなる飛躍を誓いました。

## 日中国際共同研究 研究協議会



12月19日、中国の上海体育学院にて、国際共同研究協議会が行われた。本研究は、本学と国際交流協定機関である中国青海省体育科学研究所、上海体育学院および瀋陽師範大学の4教育研究機関共同で、一般成人の健康状況について、日・中間比較、高・低地間比較という観点で、中国高地の青海省西寧市住民、中国東北部平地の瀋陽市住民、中国東南部平地の上海市住民、および柴田町の一般健常者を対象に、骨密度、体組成、身体活動状況、食習慣等に関して、昨年度より研究調査および測定を実施したものであり、約2600名強のデータを収集した。

国際共同研究協議会の目的は、研究調査成果の発表、今後の方向性について協議することであった。本学の参加者は、青海省共同研究実行委員会の実行委員長である朴澤泰治理事長、健康関連調査担当の実行委員笠原准教授、同早川准教授、同馬佳濛講師、そして、東北師範大学出身の大学院1年生金瑞年氏であった。3名の実行委員は、それぞれ、4地域間の骨密度、体組成および身体活動の状況についての地域間比較結果を、金瑞年氏は柴田町の一般健常者の健康状況について発表を行った。また、共同研究の3機関からは、青海省は体育科学研究所馬所長、瀋陽師範大学は楊光准教授(現東北師範大学准教授)、上海体育学院は陸教授のそれぞれが、所在地と日本のデータを活用し報告を行った。仙台大学からの国費留学生(中野・菊地・石橋の3名)も、上海体育学院大学院生その他とともに協議会に参加し報告を傍聴した。最後に、本共同研究の進むべき方向性を協議し、追加調査や成果の公表方法について4機関の間で合意がなされ、盛会のうちに終了した。

## 第3回就職ガイダンス～先輩の話を聞こう～が開催されました



12月15日（火）16時からB300番教室において、第3回就職ガイダンスが実施されました。入試創職部では、学生の就職支援を目的に本学の正規の授業とは別に、独自の就職ガイダンスやセミナーを開講しており、そのカリキュラムの一環として、「先輩の話を聞こう！」というイベントを実施いたしました。

このガイダンスにおきましては、学生に「卒業後の人生設計」を早期に考えさせることで、学生生活を「目標を持って」過ごさせること、また、就職活動をいち早くスタートさせるための動機付けにさせる事をねらいとしており、4年生の先輩や様々な分野の卒業生をお招きし講話を頂戴するというものです。

昨年までは、4年生の体験談のみの内容で実施しておりましたが、今回は、4年生の他に地域企業の発展を担う、宮城県内を勤務地とする若手の卒業生（5名）をお招きいたしました。

卒業生の方には、「現在担当している仕事内容、これまで仕事をしてきてうれしかったこと・つらかったこと（エピソード）、会社を選んだ理由、後輩へのアドバイス」などを中心にお話頂き、学生は真剣に耳を傾けていました。

また、入試創職部では、地元企業の将来を担う人材の育成を図り、地域経済に貢献できる人材を輩出できるよう目指しており、12月22日には「魅力ある中堅・中小企業の探し方」というテーマで企業研究セミナーを開催いたしました。引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

### <発表者>

#### 【4年生】

仙台市消防局合格者、宮城県警察合格者、清山会医療福祉グループ内定者

#### 【卒業生】

宮城トヨタ自動車株式会社、株式会社LEOC、株式会社トラストネットワーク、株式会社グラン・スポール、ゼビオ株式会社

<報告：入試創職室担当課長 中鉢芳尚>

## 平成27年年度 学生相談室・教育改善企画運営委員会 共同開催教職員研修会「最近の大学生に対する授業実践のヒント」



12月22日（火）13時30分から、平成27年度学生相談室・教育改善企画運営委員会合同開催の教職員研修会が第5体育館大教室で開催されました。講師に聖徳大学教授の八木正一先生をお招きし、教職員と教職を目指す学生約60名が参加しました。

八木先生は、授業の構成理論を中心に研究を進めると同時に、教材や授業プランの開発も行っており、「教科校正のあり方」の検討や、新しいカリキュラム開発にも取り組んでいる教授法の専門家です。今回は「最近の大学生に対する授業実践のヒント」と題し、日頃の教育活動に悩む教員やこれから教育実習等に臨む学生にむけて、教育方法の工夫についてお話を頂きました。

最近の学生にみられる傾向として、勉強ができる学生もできない学生も「授業を楽しんでいない」こと、『学びからの逃走』ともいえる「大学に入った時点で基礎学力が足りない」こと、「自己肯定感や自尊感情が低い」ことの三つが挙げられました。

授業を楽しくするアイデアとして、社会科の授業で本物の婚姻届を書くなどの「要素を工夫」や、具体性・典型性・意外性・挑戦性を取り入れた「教材・教具の工夫」、学生主体で作る・提案することを目的とした「学習活動の工夫」、一文一意の意識、指示行為を直接言わないなどの「教授行為の工夫」が紹介されました。

学生の基礎学力不足には「書かせる」ことの重要性を説き、単純ではあるけれども書かせたことを読み上げるなどの工夫が紹介されました。そして、自尊感情や自己肯定感の低さへの対応として、知っている学生のみ回答できる質問よりも、知っている学生も知らない学生も答えることができる質問を心掛けることの重要性を強調しておられました。学生の心の問題には、まず素人でどうにかなるものと、ならないものの区別をつけなければなりません。そのうえで、学生の主張や思いを傾聴する重要性が述べられました。

評価の視点としては、他者との比較ではなく、個人に着目し、今日どれだけ伸びたかに注目することが大事であること、相手の自尊感情を傷つけない工夫として「あなたがそんなことをすると、私が悲しい」など、主語を「I」として対応することなど具体的な対応のヒントもお話いただきました。

今回の八木先生の講義の中には、実際に「CD」や「鼻笛」を使ったり、海外の小中学校で使用されている日本を紹介したイラスト（1975年当時）をご提示くださったりと、聴講者を惹きつける工夫がちりばめられており、授業実践のアイデアを身をもって体感することができました。

改めて、教育は「教授者と学生との間での行為」であり、学生が主体的に学ぶよう教授側が工夫をこらすことが重要である、と感じたご講義でした。

<報告：准教授 菊地直子>

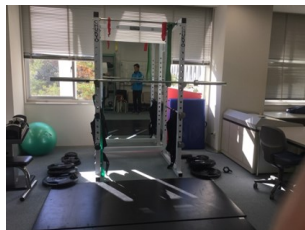
## 中京大学への訪問

私は現在、川平ATRを明成高校により良く根付かせ、アスレティックトレーニングの認知向上・普及を目的とし、他大学や高校で活躍されているNATA-ATCを尋ねてATRを訪問し、良い運営や取り組みを学び、運営上での困難などを調査研究しています。これまでに早稲田実業（東京都国分寺市）、アメリカンスクールインジャパン（東京都調布市）、愛知東邦大学（愛知県名古屋市）へ伺い、ATRを実質運営している方々から設立の経緯、運営方針、様々な取組経験についてお話を伺ってきました。また、昨年10月に日本体育大学で開催された『大学アスリートサポートシステムシンポジウム2015』では、東海大学（有賀教授）、国際武道大学（山本教授）、日本体育大学（西山教授）におけるAT関連事業についても学びました。多くのAT関係者から知恵とアドバイスを頂き、川平ATR運営に役立てていきたいと思っています。

平成27年12月18日は、以前より是非見学させて頂きたかった大学への訪問がついに実現しました。それは愛知県豊田市にある中京大学豊田キャンパスです。エリートアスリートを輩出し続ける歴史ある大学への訪問をととても楽しみにしていました。当日はスポーツ科学部助教の村田先生よりアスレティックトレーニング実習室、スポーツ振興室を案内して頂きました。同大スポーツ健康科学科トレーナーコースには1学年約20名の学生がいるそうです。中京大学は日本体育協会認定校であり、各学生は学生トレーナーとして部活動に所属し、学習したことを実践する場としています。教員は日本体育協会認定アスレティックトレーナー2名のみということで、各部活動での実習に関しては3,4年生が1,2年生を指導するということです。



スポーツ振興室の全体



スポーツ振興室の器具

スポーツ振興室（CSIPプロジェクト）では、高谷氏をはじめとしたNATA-ATCの2名がアメリカEXOS社とプロジェクト提携し、学内と外部のエリートアスリートに対しトレーニング指導をしながら、共同研究や中京大学独自のマニュアル作成などを行っています。お二人は、授業や部活、プロジェクトについて詳細にお話を下さり、私としても仙台大学での取組を紹介したりするなど、とても有意義な時間となりました。

今回の訪問は、中京大学の前学長であり現在は学事顧問の北川薫先生と「全国体育スポーツ系大学協議会」（旧「体育大学協議会」）などの活動を通して懇意でいらっしゃる朴澤理事長・学事顧問の多大なお力添えにより実現致しました。北川先生はご多忙であるにも関わらず、自ら豊田キャンパスと名古屋キャンパスをご案内して下さいました。豊田キャンパスのスポーツ施設は全てが素晴らしく、他大学にはないオーロラリンクや屋外温水プールなどは特に秀逸で、エリートアスリートを輩出する環境を間近に感じることができました。また、北川先生はキャンパスを案内して下さいている合間にスポーツ科学と共存してはいけない知恵や経験についてお話をして下さいました。北川先生のお計らいで学部教員の方やCISPプロジェクトでご活躍されている方々などと交流を持つこともできました。中京大学訪問で体験した施設見学や出会い、北川先生から頂いた教養は、川平ATRの活動方針を固めるため、さらには私自身のビジョン形成のために貴重な体験となりました。このような機会を与えて下さいました朴澤理事長、阿部学長、ならびにAT関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

<報告：新助手 白坂広子>

## 女子サッカー部、インカレ初の8強入り逃す

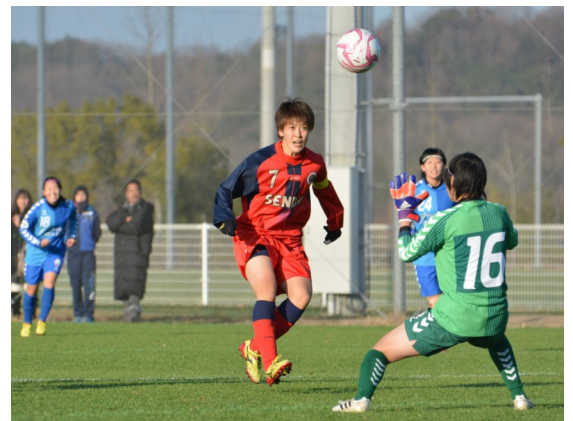


試合前の仙台大学女子サッカー部イレブン（1回戦）  
＝兵庫県三木総合防災公園陸上競技場

「第24回全日本大学女子サッカー選手権大会（インカレ）」が兵庫県三木総合防災公園で行なわれ、6年連続出場の本学女子サッカー部（東北第1代表）は、1回戦（12月26日）で札幌大学（北海道代表）と対戦しました。前半5分に直接フリーキックを決められ、先制を許す苦しい展開も、同17分にコーナーキックからDF高野沙緒里選手（体育学科2年－東京・村田女子高校出身）が頭で合わせ同点。前半ロスタイムにMF加賀孝子主将（スポーツ情報マスメディア学科4年－宮城・聖和学園高校出身）が落ち着いてPKを決め、勝ち越し。

後半5分には、MF門間香奈実選手（体育学科4年－宮城・東北高校出身）が左足で決めて3－1と突き放し、後半ロスタイムに加賀主将（同）が2本目のPKを決めて、4－1で逆転勝ちを収めました。

2回戦（12月28日）は、初の8強入りをかけて、静岡産業大学（東海第1代表）と対戦しました。両者立ち上がりから互角の戦いが続き、0－0で前半を折り返しました。後半17分にゴール左からの直接フリーキックを決められ失点。その後、仙台大学が猛攻を仕掛け、相手ゴールに何度も迫りますが、最後までゴールを割れず、0－1で惜敗。インカレ初の8強入りを逃しました。



0－1で迎えた後半、加賀主将がループシュートを放つも、惜しくもゴールポストに阻まれた（2回戦）。  
＝兵庫県三木総合防災公園第2球技場

## 熊原健人投手（体育学科4年）に後援会



地元の少年野球チームの選手から花束を贈呈される熊原投手  
＝かくだ田園ホール

仙台大学から初のプロ野球選手となり、横浜DeNAベイスターズに入団が決まった本学硬式野球部の熊原健人投手（体育学科4年－宮城・柴田高校出身）の後援会が角田市民有志により発足し、12月7日（月）に「かくだ田園ホール」で激励会が行なわれました。

激励会には角田市民ら約500名が参加。後援会名誉会長の大友喜助角田市長は「熊原投手の最速152Kmの直球を角田宇宙センターにちなんでロケットボールと名付けたい。子どもたちが憧れるプロ野球選手として、長く活躍されることを期待している」と祝辞を述べられました。本学硬式野球部の森本吉謙監督も来賓として招かれ「プロ野球は相当に厳しい世界。良い時も悪い時も変わらず熊原を応援して頂きたい」と話されました。

熊原投手は「両親・仲間・恩師のお陰でプロ野球選手になることができました。子どもたちにも夢を追いかけてほしいです」と語りました。

### <熊原健人投手後援会事務局>

個人会員年会費：1,000円

問い合わせ：0224-63-3154

（河北新報角田専売所）



## BSL部、宮嶋克幸選手(体育学科2年)が「銀」・「銅」獲得— スケルトンアメリカンズカップ



写真：本人提供 vancouver 2010

第3戦の表彰式の様子(左から2人目が宮嶋選手)  
=カナダ・ウィスラーズライディングセンター

カナダのウィスラーズライディングセンターで行なわれた「スケルトンのアメリカンズカップ第3戦・第4戦」において、本学BSL部(ボブスレー・リュージュ・スケルトン部)の宮嶋克幸選手(体育学科2年—北海道・札幌丘珠高校出身)が、11月26日の第3戦で2回の合計タイム1分48秒75(出場24選手)で「銀」メダルを獲得。また、11月27日の第4戦では、2回の合計タイム1分48秒74(出場24選手)で「銅」メダルを獲得しました。

2018年の韓国・平昌冬季五輪にスケルトン競技での出場を目指す宮嶋選手に、大会を振り返ってもらいと共に、今後の意気込みなどについてお話を伺いました。



### Q1.大会を振り返って—

初めての国際大会でした。アナウンスの英語がうまく聞き取れないこともあって、かなり緊張しました。正直、滑走前から勝負できる環境ではありませんでした。英語力の重要性を痛感した大会でしたが、英語力を身に付ければ、もっと結果を残せる自信があります。良い経験となった大会でした。

### Q2.課題は—

さらに競技力を向上させることは当然ですが、国際大会で勝つためには、英語力を身に付けることが最低条件であると思います。ドイツ語も身に付けることができれば、違う情報を得ることもできますが、まずは英語の習得に励みたいと思います。英語は、パランギ講師の「英会話」の講義を履修しています。また、遠藤保雄教授からは、実践的な英会話を講義外(毎週水曜日5時限)でご指導頂いています。英語に触れる機会を意識的に増やし、自信を持って国際大会に臨んでいきたいです。

### Q3.今後の意気込み—

全日本選手権(12月27日)の「優勝」と世界ジュニア選手権(1月18日—26日：ドイツ)で表彰台に立つことが目標です。この二つの目標を達成することが2018年の韓国・平昌冬季五輪への近道になると思っています。感謝の気持ちを忘れず、心から応援してもらえるよう精進していきたいと思っています。